漆器・陶器・ガラス

1 津軽塗 Tsugaru Lacquer Ware

「津軽の馬鹿塗り」の異名をもつほど手間と時間をかけて丁寧につくられる逸品「津軽塗」

津軽塗はおよそ 300 年前の津軽藩四代藩主信政の時代に津軽藩召し抱えの塗師池田源兵衛によって始められたと伝えられている。江戸時代には津軽藩の保護･育成の下､主に藩の調度品として用いられた。明治初期に産業として確立後は人々に親しまれる愛玩品として幅広く使われている。
津軽塗の代表格である唐塗はヒバの素地から塗り・研ぎ・磨きを繰り返し、48 もの長い工程を経て完成される堅牢優美な塗物である。唐塗だけではなく七々子塗・紋紗塗・錦塗の伝統的な 4 つの技法が現在まで受け継がれている。さらに現代風のアレンジを加えて多彩な紋様を生み出すことができる。昭和 50 年に国の伝統的工芸品として産業指定。平成 29 年に重要無形文化財として技術指定され、津軽塗技術保存会が保持団体認定を受けた。

主な製品　椀・重箱・テーブル・茶器・花器・盆・箸・飾棚

主な製造工程　木地固め→布着せ→地付け→仕掛け→彩色→荒研ぎ→炭はぎ→摺漆→艶付→上塗→完成

CONTACT

青森県漆器協同組合連合会	弘前市神田 2-4-9　☎ 0172-35-3629	津軽藩ねぷた村	弘前市亀甲町 61　☎ 0172-39-1511
弘前津軽塗商工業協同組合	弘前市西大工町 82-1　☎ 0172-35-4004	津軽塗技術保存会	弘前市賀田 1-1-1　☎ 0172-82-1642

漆器・陶器・ガラス

2 津軽焼 Tsugaru Pottery

津軽の風土を表すような素朴ながらも独特な味わいがある「津軽焼」

津軽焼の源流は津軽藩四代藩主信政によって集められた陶工たちが築いた平清水焼・大沢焼・下川原焼・悪土焼である。藩政時代には主として津軽藩の調度品や日用雑器が焼かれていた。
しかし明治に入り鉄道の開通に伴って流入した他県の焼物に押された結果、大正時代には一時途絶えてしまう。現在の津軽焼きは昭和に入って再興したものである。
現在の津軽焼は地元の土の味を生かし、釉薬に黒天目釉やりんごの木灰を原料とするりんご釉を使うものが主流になっている。このようにして作られる津軽焼は風土の特徴が生かされた素朴な色合いが魅力的な焼物である。

主な製品　茶器・花器・酒器・皿類

主な製造工程　土練り→成形→加工→乾燥→素焼き→下絵付け→施釉→本焼き（焼成）→完成

CONTACT

津軽藩ねぷた村	弘前市亀甲町 61　☎ 0172-39-1511	ひろの窯	弘前市広野 2-3-5　☎ 0172-87-0211
高野陶房	弘前市清水森字沼田 16-3　☎ 0172-87-5844	津軽千代造窯	弘前市城南 4-11-3　☎ 0172-32-8465

漆器・陶器・ガラス

3 八戸焼 Hachinohe Pottery

青森の大自然を連想させる焼物「八戸焼」

八戸焼は、江戸時代末期まで八戸の山中で焼かれていた焼き物である。藩主御用達品であった津軽焼とは異なり、八戸焼は民窯（庶民の為の焼き物）として親しまれていたと言われている。
一時期廃れてしまった八戸焼だが、昭和 50 年渡辺昭山の手によって再興された。現在では八戸市内で採取した粘土に工夫を加え、百数十年前の八戸焼を再現している。
八戸焼の特徴は、独自の緑釉を使い、青森の自然を体現した「緑色」である。青森の豊かな自然を焼物から感じ取れる一品といえる。

主な製品　花器・茶器・酒器・食器

主な製造工程　成形→乾燥→素焼き→上ぐすり付け→本焼き→完成

CONTACT

渡辺　陶房	八戸市上野字上野平 33-6　☎ 0178-23-4020

漆器・陶器・ガラス

4 津軽びいどろ Tsugaru Glassware

青森の移りゆく四季を色とりどりの表情で魅せる「津軽びいどろ」

津軽びいどろは陸奥湾近辺で作られていた漁業用浮玉の製法を応用して作られるようになったガラス工芸品である。津軽半島の西側にある七里長浜の砂を材料に、古来からある難易度が高い「宙吹き」の技法を用いて生み出されたのが始まりである。
1500 度の高温で材料を溶解し、成形温度 1200 度という灼熱の中で真っ赤に溶けたガラスは、吹き棹に巻き取られ職人に息を吹き込まれることによって、豊かなかたちと色合いを持った工芸品に姿を変える。現在では従来の緑色だけでなくピンク・赤・黄・白などカラフルで実用的な商品が作られている。

主な製品　花瓶・冷酒用徳利・ワイングラス

主な製造工程　材料調合→溶解→宙吹き→徐冷→仕上げ→完成

CONTACT

北洋硝子株式会社	青森市富田 4-29-13　☎ 017-782-5183

木・竹工品

5 あけび蔓細工 "Akebi" Vine Crafts

丹念に編み込まれ、丈夫で使うほどになじむ「あけび蔓細工」

あけび蔓細工は江戸時代の末に岩木山麓の嶽（だけ）温泉で、湯治客への土産品として、付近の山々に自生するあけび蔓を原料とし、炭籠・手提げ籠などが広く作られるようになった。明治以降には内外の展覧会をはじめ、広く海外へも市場が広がった。
全行程を手作業で行い、時間と手間暇をかけて丹念に仕上げられているため、あけび蔓細工のもつ色合い、野趣豊かな手触り、基本的な並編みや中が透けてみえるこだし編みなどの多彩な編み模様は、落ち着きと自然の温かさを感じさせる。また、耐久性に優れ、使うほどに滑らかさと艶で出てくるため末永く楽しめる一品である。

主な製品 手提げ籠・盆・ざる

主な製造工程 蔓の選定→陰干し乾燥→水に浸す→節取り→底編み→胴編み→縁編み→手付け→端切り→仕上げ→完成

CONTACT

有限会社宮本工芸　弘前市南横町 7　☎ 0172-32-0796

木・竹工品

6 ブナコ BUNACO

独自のユニークな製法で変幻自在に姿を変えることができる「ブナコ」

ブナコは、昭和 30 年代に青森県工業試験場で試作、研究の結果考案された木工品である。日本一の蓄積量を誇る青森県のブナを有効に活用するため、水を多く吸い込むブナの特徴を最大限に生かし、薄いテープ状にして螺旋状に巻き立体の物を形作ることで、材料となる木材を無駄なく使うことができる。従来の木工品にはないような形状も表現することができ、ひとつひとつが丁寧に手作りされている。
現在では食器用品だけではなく、ランプやスピーカーなど、デザイン性の高いインテリア用品にもその技術は応用されている。

主な製品 食器・ランプ・スピーカー・ティッシュボックス・ダストボックス

主な製造工程 材料ひき割り→底板加工→巻き→型上げ→接着→木地調整→下塗り塗装→仕上げ塗装→完成

CONTACT

ブナコ株式会社　弘前市豊原 1-5-4　☎ 0172-34-8715

木・竹工品

7 津軽桐下駄 Tsugaru paulownia "Geta" (Wooden Clogs)

厳しい風雪の中で育まれ、木質が堅く木目も美しい「津軽桐下駄」

日本人の履物として古代より用いられてきた下駄は江戸時代に広く流行したが、生活の洋風化が進むことで今日では職人の数も少なくなっている。
下駄の材料には桐が最も適している。理由は軽く柔らかいうえに、反動が少なく温度変化にも強いからである。特に厳しい風雪の中で育まれた津軽の桐は木質も堅く、木目も美しい。
白木の下駄のほか雪の多い土地柄に合わせた雪下駄、津軽塗下駄などが古くから作られ、しっとりしとした雰囲気を醸し出している。

主な製品 白木下駄・雪下駄・津軽塗下駄

主な製造工程 桐の切断→自然乾燥→輪切り→木取り→あいだひき→あらつき→おがみつき→わきかんな→すみつけ→はなまわし→はなあけ→つらがけ→とくさがけ→完成

CONTACT

阿保下駄製作所　弘前市城東北 3-8-20　☎ 0172-26-1588

木・竹工品

8 ひば曲物 Aomori Cypress Wood Products

ヒバの美しい木目とゆるやかな曲線美が魅力の「ひば曲物」

ひば曲物は日本三大美林のひとつである青森ヒバを材料としており、美しい木目とゆるやかな曲線美が特徴である。曲物の材料として使われるヒバは耐久性があって樹脂成分が多い上に水分がしみにくいため実用性も高い。ひば曲物は型枠を使わずに「ゴロ」と呼ばれる丸太にヒバを巻き付けるように少しずつ転がしながら作るため、ゆるやかな曲線美が生み出される。
ヒバの木目を生かしたこの曲物は、手作りの素朴さにあふれた工芸品である。

主な製品 曲げわっぱ・盆

主な製造工程 ヒバの切断→木取り→銑がけ→曲げ→シタぬき→合わせ→とじ→ならし→シタいれ→足付け→仕上げ→完成

CONTACT

境　勇三　藤崎町藤崎字武元 24-1　☎ 0172-75-3175

木・竹工品

9 南部総桐箪笥 Nambu Paulownia Chest

職人技が映える美しい桐の柾目が醸し出す気品あふれる「南部総桐箪笥」

古く城下町として発達した三戸町は南部桐生産の中心地である。大正時代初期から桐材は下駄にも利用され昭和 30 年代まで全国に出荷されていた。
三戸町内及び周辺の町には家具店があり明治時代中ごろから八戸周辺で桐箪笥の製作が始まったとみられている。
総桐箪笥は金具のほかは釘に至るまですべて木材を使用して作り上げられる。桐の生命ともいうべき柾目は、丹念な手作業が醸し出す美しさと気品を感じさせる。

主な製品 総桐箪笥・小箪笥・机・収納箱

主な製造工程 木釘作り→造材→乾燥→木取り→狂い直し→板接ぎ→組立加工→仕上げ・着色→完成

CONTACT

在家　福治　八戸市河原木字前谷地 118-3　☎ 0178-27-5965

木・竹工品

10 南部花形組子　Nambu Floral "Kumiko" Woodworking

高度に熟練した技術が芸術的な曲線美を生む「南部花形組子」

南部花形組子は飛鳥時代から建築物の装飾として受け継がれている組子の一種である。
花形カンナという専用のカンナを用いて曲線的な加工を施し、釘を一切使わずに美しい幾何学模様を描く木工品である。原材料には主に県産材の青森ヒバを使用し、木材の種類や木肌の色の違いを利用して模様を描くことが南部花形組子の特長である。
曲線的で美しい南部花形組子は和風の建具のみならず、洋風ドアや電気スタンドなど「和」だけではなく「洋」にも取り入れられている。

主な製品　ティッシュボックス・電気スタンド・行灯・衝立など

主な製造工程　小割→引割→寸法の割り出し→削り→仕上げ→組立て→完成

CONTACT

舘タテグ工芸　八戸市小中野 5-10-31　☎ 0178-24-5438

木・竹工品

11 津軽竹籠　Tsugaru Bamboo Baskets

りんご畑から生まれた丈夫で軽く実用性の高い「津軽竹籠」

竹籠を作る技術は約 200 年前に遡るが、今日のように多量に生産されるようになったのは、津軽地方がりんごの産地として定着し、作業用の手籠が作られるようになってからである。
岩木山麓や八甲田山麓で採取される丈夫で耐久性に優れた根曲竹を用いて作られる津軽竹細工は、他産地の竹製品とは異なり、六角目などの大まかな編み目で、しなやかさ、軽さと丈夫さが特徴である。
現在では丸碗かごや果物皿など大きさや用途に応じて様々な商品が作られている。

主な製品　りんご手籠・野菜籠・椀籠・果物籠

主な製造工程　竹採取→四つ割→編み→完成

CONTACT

三上　司　弘前市大字八幡字古喜田 51-4　☎ 0172-82-3054

染織品・繊維製品

12 こぎん刺し　"Kogin" Embroidery

厳しい北国の自然の中で生きてきた女性の知恵の産物「こぎん刺し」

江戸時代、津軽の農民は木綿の衣料を着ることが許されていなかった。そのため麻地の着物を何枚も重ね着して寒さをしのいでいた。そこで農村の女性たちは保温と補強のために、麻の布地の要所要所に木綿で刺子を施した。こうして生み出されたこぎん刺しは、厳しい北国の自然の中で生きてきた女性の知恵の産物である。
こぎん刺しの特徴は、藍染の麻地に白い木綿糸で縦の織り目に対して奇数の目を数えて手刺しすることで、素朴で美しい幾何学模様が生み出されるところにある。
また今日では用途によって木綿地やウール地なども用いられており、色彩も時代を経て多彩さを増している。

主な製品　巾着・帯・バッグ・ネクタイ

主な製造工程　糸より→麻地染め→生地織り→生地を整える→裁断→刺し→仕上げ→加工→完成

CONTACT

前田セツこぎん研究会　青森市安方 1-1-40-2F　☎ 017-735-5311

有限会社弘前こぎん研究所　弘前市在府町 61　☎ 0172-32-0595

岩木かちゃらず会　弘前市鳥井野字長田 60-6　☎ 0172-82-5109

染織品・繊維製品

13 南部菱刺し　Nambu Diamond Embroidery

ウメノハナ・クルミなどの多彩な幾何学紋様が美しい「南部菱刺し」

江戸時代、八戸を中心とする南部地方で南部菱刺しが生み出された。当時の農民たちは麻や苧麻の着物しか着ることを許されておらず、木綿は糸として使用するものと決められていた。そこで農村の女性たちは補強と保温のために麻に木綿糸を刺して、厳しい北国の生活をしのいできた。この技術が現在まで受け継がれている。
菱刺しの特徴は麻布に綿糸で偶数目を拾って織り成されるウメノハナ・キジノアシなどの横に長い菱型の多彩な幾何学紋様である。
現在では麻地以外に木綿地やウール地も用いられ、ネクタイやタペストリーなど新たな製品にもその技術は応用されている。

主な製品　卓布・前垂れ・のれん・バッグ

主な製造工程　麻地の地直し→紋様のデザイン→刺し→仕上げ→完成

CONTACT

天羽　やよい　八戸市売市字観音下 67　☎ 0178-46-4662

西野刺っ娘の会　八戸市長苗代字内舟渡 25-1　☎ 0178-28-2886

南部ひしざし七戸町保存会　七戸町字舘野 32-69　☎ 0176-62-3033

高橋　博子　五戸町字古舘 1-7　☎ 0178-62-5489

南部菱刺し工房アトリエ標 HANADA　八戸市白銀町字人形沢 6　☎ 0178-33-0569

南部菱刺研究会・つづれや　八戸市大字田面木字上野平 91-7　☎ 090-3532-4855

北向　春枝　おいらせ町中下田 147-12　☎ 0178-56- 4107

染織品・繊維製品

14 津軽裂織　Tsugaru Weaving

独特の手ざわりと深みのある色合いが美しい「津軽裂織」

津軽では裂織を「サクリ」と呼ぶ。江戸中期以降津軽の海岸線地域では日本海交易の北前船により古手木綿が普及し、布を裂いて織るサクリが漁師・農民の仕事着や日常着として作られた。
サクリはその用途から薄く柔らかく仕上がるように工夫された技法で織られ、真新しいサクリは晴れ着として男たちや女たちを飾り、雪国の寒さから人々を守った。
裂かれた布のささくれた風合いが独特の手ざわりを生み、古着の色の組み合わせによる時を経た深みのある色合いが魅力となっている。現在では、絹布をブナやナラ、りんごなどで染めて横糸にした綴れ織り・綾織りなどの技法を使ったバッグのほかコートなど様々な商品がある。

主な製品　卓布・バッグ・コート

主な製造工程　デザイン及び設計→機ごしらえ→裂布を作る→製織→仕上げ→完成

CONTACT

テキスタイルスタジオ村上・青森手織サクリ会	青森市高田朝日山 809-256	☎ 017-739-7761
裂き織り工房ポンテ	平内町小豆沢字茂浦沢 101-2	☎ 017-755-2765
葛西　やえ子	つがる市柏桑野木田福井 71-4	☎ 0173-25-3837

染織品・繊維製品

15 南部裂織　Nambu Weaving

古布を再生し新しい命を吹き込む「南部裂織」

南部裂織は江戸時代に着古した着物や布を再生する機織りの一技法として生み出された織物である。当時は、寒冷な気候のために綿の栽培は難しく、北前船で運ばれた木綿や古手木綿はとても貴重な存在であった。そのため、厳しい生活を強いられた農村地方の女性たちが布を大切にするための知恵から生まれたものである。
細く裂いた布を横糸に、木綿糸を縦糸にして地機で織った裂織は丈夫で暖かく、そのカラフルな色移りと複雑な機上げが特徴である。
主としてこたつ掛けや帯などに用いられてきたが、現在ではテーブルカバーをはじめ現代感覚の手織物にも応用されている。

主な製品　卓布・手提げ袋・こたつ掛け

主な製造工程　整経→筬（おさ）通し→男巻き（おまき）→綾越し→糸綜絖作り→元寄せ→機上げ→製織→完成

CONTACT

八戸南部裂織工房『澄』	八戸市江陽 1-28-6	☎ 0178-24-5045	八戸さき織の会	五戸町中崎 5-11	☎ 0178-62-3355
百彩工房（ももいろこうぼう）	八戸市新井田朴木沢 6-5	☎ 0178-25-1653	南部裂織保存会	十和田市伝法寺字平窪 37-21	☎ 0176-20-8700
南部裂織七戸町保存会	七戸町字舘野 32-69	☎ 0176-62-3033	下北南部裂織	むつ市小川町 1-12-2	☎ 0175-22-3789
仏ケ浦裂き織り	佐井村アルサス内	☎ 0175-38-2939	むつ裂織サークル	むつ市大平町 9-7	☎ 0175-24-0508
五戸町裂織愛好会	五戸町字上大町 10	☎ 0178-62-2039			

染織品・繊維製品

16 津軽組ひも　Tsugaru "Kumihimo" (Braiding)

青森の風土を感じる優しい色合いと高度な組み技術が融合した「津軽組ひも」

縄文土器の縄目模様からもわかるように、組み・編みの歴史は古い。
青森では津軽五所川原近郊の生活必需品であった藁工芸品にその歴史を見ることができる。特異な気候風土の中で生活する人々の知恵と創造と美意識が生んだ藁工芸品。藁工芸品には簡単な三つ組みから、高度な技術の笹浪組みまで取り入れられている。
この藁工芸品の編み方を応用し、りんごや藍などの草木染めを取り入れて津軽の命を吹き込み、津軽組ひもが誕生した。帯締めをはじめアクセサリーなどにも広く活用されている。

主な製品　帯締め・ブローチ・ネックレス・慶弔結び

主な製造工程　糸割り→染色→糸繰り→経尺→玉つけ→組みあげ→仕上げ→完成

CONTACT

川口　良子	五所川原市金木町菅原 240-17	☎ 0173-53-3722

金工品

17 津軽打刃物　Tsugaru Handcrafted Knives

優れた切れ味と耐久性をもつ実用的な「津軽打刃物」

鍛冶は古くより刀鍛冶・農具鍛冶・鉄砲鍛冶と分かれていた。近世になって包丁鍛冶が出てきたが、一般には農具・工具や包丁・鋏などを生産していた。
鍛冶町という町名が示すとおり、藩政時代には弘前でも多くの鍛冶屋が軒を連ね農具や武器を製造していた。現在でも伝統的な技能を受け継いだ職人たちが刃物を中心に作り続けている。
伝統的な「火造り」、「泥塗り」などの焼き入れ技術により、優れた切れ味と耐久性をもつ品質の高い包丁類が作られている。また、りんごの産地である津軽には欠くことのできない摘果・枝切り用の剪定鋏も作られている。

主な製品　和包丁・剪定鋏・鉈・鎌

主な製造工程　火造り→荒仕上げ→焼き入れ→焼きもどし→刃付け→仕上げ→柄付け→完成

CONTACT

保村打刃物製作所	弘前市代官町 68-2	☎ 0172-32-1614	有限会社二唐刃物鍛造所	弘前市金属町 4-1	☎ 0172-88-2881
三國刃物製作所	弘前市金属町 4-15	☎ 0172-88-0555	三國打刃物店	弘前市茂森町 170-3	☎ 0172-33-2202
田澤刃物製作所	弘前市茂森新町 2-3-11	☎ 0172-32-1087			